認知症を支える
徘徊高齢者をめぐって
上

母見守り苦悩の介護

2キロ先で発見も・夜間も気抜けず

最期は家で

「ここから外は出ないで下さい」。縁側のガラス戸の内側に黒いマジックで手書きした張り紙がある。

文字を目で追った桜井テル子さん（八心）は気にする様子もなく、戸を開けて外に出ようとする。その動作を約二時間も繰り返した。男物のサンダルを探し出し、縁側から外に出ようとして転倒したこともあった。

テル子さんは、脳血管性の認知症で、要介護3だ。同居する長女宏子さん（六三）＝高崎市＝にとって家庭を守り、父に尽くすことに生きがいを感じるような母だった。きれい好きできちょうめんな性格。裁縫を独学で習得して、頼まれた洋服や着物の仕立てをきちんとこなして信頼されていた。

二〇〇〇年十月。父が転倒が原因で他界すると、落ち込んでうつ状態になっていった。宏子さんは在宅ヘルパーの経験を生かし、前の年に配食サービスを行うNPO法人を立ち上げていた。家に閉じこもりがちのテル子さんに地域の人と関わりを持ってもらおうと、デイサービスも始めた。

認知症の症状は少しずつ進行した。「どうせわたしは邪魔なんだろう」。病院に連れて行くと、大きな声を上げて暴れた。暴言も向けられた。「トイレに行きたい」というので連れていくと、目を離した隙に隣の風呂場に入っている。便座にどう座るかも分からなくなった。「わたしはくるくるパーになっちゃった」。テル子さんは繰り返した。

徘徊（はいかい）は約五年前からひどくなった。毎日のように、わずかな隙に自宅を出てしまう。橋を渡って約二キロ離れた市街地まで歩いて行った。警察から保護の連絡を受けたこともある。夜間が特に心配で、睡眠もとれない。徘徊のたびに捜し歩いた。「何度繰り返せばいいのか」。むなしさに、涙が込み上げた。徹夜続きのような疲れた状態で、職場に向かった。仕事にミスも出始めた。

「このままではわたしもだめになる」。知人の紹介で空きが出たグループホームに預けた。柵をよじのぼり、コンセントを抜こうとして転倒、救急搬送された。昨年十月には入院先の病院で点滴のチューブを抜いてしまったことがあった。病院で寝泊まりして付き添った。許可を得て外出したわずかな間に、看護師から携帯電話で呼び戻された。

「十分と目が離せません」

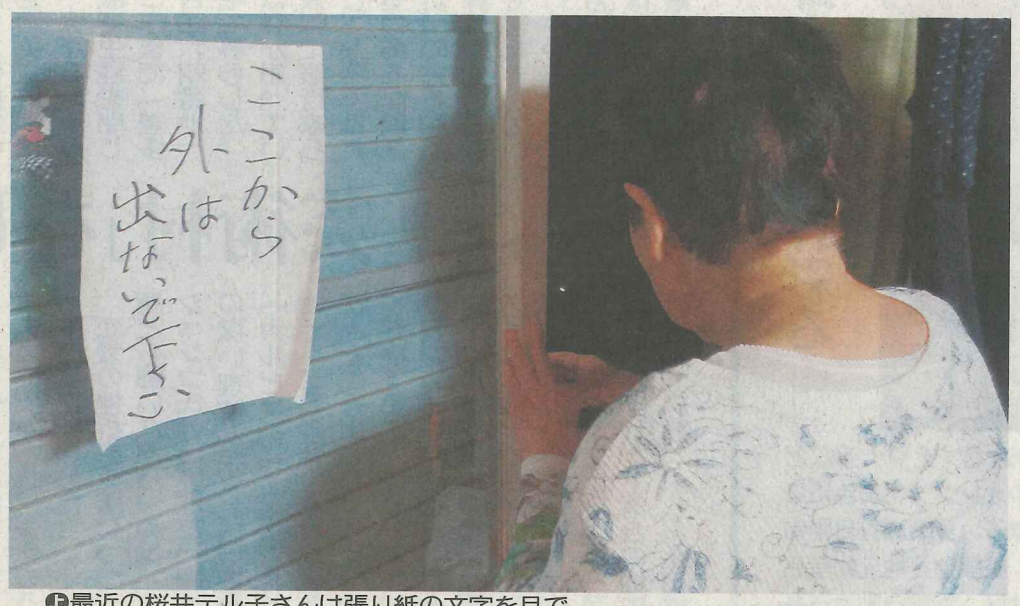
宏子さんによると、テル子さんの体調は「毎日が命をありがとうの状態」。テル子さんが入院中に「産んでくれた母に、わたしは何ができるのか」と真剣に悩んだ。「自分の命に代えても、母の最期はできる限り家で迎えさせてやりたい」と同十一月から、同居して介護を始めた。

「危険だからさわらないで」「ここから外は出ないで」。テル子さんに注意を促そうと、家中を張り紙だらけにした。はじめは読んでいたが、最近は理解することもできなくなった。徘徊が怖くて玄関の鍵を二重にした。だが、母の気持ちを無視しているような気がしてやめた。寝ていても抜け出そうとするテル子さんに気が付くように、同じ部屋に布団を敷いた。

そんな時、高崎市が前月から衛星利用測位システム（GPS）を使って徘徊高齢者の救援システムの運用を始めたことを知った。

◇

県内の認知症高齢者は八万五千人を超える。県の推計では団塊の世代が七十五歳以上となる二〇二五年には十一万人以上になる。認知症になっても、尊厳を保ちながら住み慣れた場所で安心して暮らせるには、どうすればいいのか。徘徊する高齢者を支え、見守る家族の思いや地域の取り組みから、課題を探った。



上最近の桜井テル子さんは張り紙の文字を目で追っても、理解しなくなった＝いずれも高崎市で（長女の宏子さん提供）
下日々の介護の様子を話す宏子さん